

忍城水攻め余話3

その後の成田氏

天正18年(1590)7月14日、忍城は豊臣軍に引き渡され、城主成田氏は一族や家臣共ども城を出ることとなりました。成田氏長は豊臣秀吉方の武将蒲生氏郷に預けられましたが、ここからが戦国の世を生き抜いた成田氏長の本領発揮の場となりました。忍城には徳川家康の四男松平忠吉が入ることとなりましたが、忠吉が幼少のため、暫定措置として家康は家臣の松平家忠を忍城に入れて、治安維持や城の修復に当たらせました。家忠が忍城に入城した半月余り後の9月18日に、成田氏長から家忠に進物が贈られ、以降も家忠と氏長の交流は続きます。二人とも連歌という共通の趣味がありましたが、秀吉に抵抗した敗軍の将が、かつての城地を占領した武将と誼を通じることができたのも、氏長の巧みな外交術を推察させる出来事です。

蒲生氏郷が秀吉から陸奥国会津42万石を与えられると、氏長はこれに従い会津に移ります。天正19年(1591)1月に起きた、九戸城(岩手県二戸市)城主の九戸政実の反乱鎮圧に氏郷は出兵しますが、その陣立書のなかに「成田兄弟」の名が見えることから、氏長と弟の泰親

は蒲生軍の一員として出兵したと思われる。同年、氏長は下野国烏山に2万石の領地を与えられ、大名として復活しました。文禄4年(1595)12月に氏長が死去すると泰親が跡を継ぎ、泰親が隠居するとその子らが家督を継ぎますが、実質的な当主は泰親だったと思われます。しかし、元和2年(1616)に泰親が死去すると家督争いが起り、同8年(1622)に成田氏本家は改易となりました。

一方、成田長親は忍城開城後、氏長と袂を分かちました。長親の長男長季が新しく忍城主となった松平忠吉に仕え、忠吉が慶長5年(1600)に尾張国清洲に転封となると、長季も尾張に移りました。同12年(1607)に忠吉が死去し、新たに尾張国の領主となった徳川義直は、忠吉の家臣の多くを自身の家臣団に組み入れました。長季も義直に仕え、以後は尾張藩士として、その子孫はいくつかの分家を出して成田氏の家系をつないでいきました。長親も尾張に移り、同17年(1612)12月に67歳で死去しました。

長親のひ孫たちによって貞享元年(1684)に作られた家系図が、成田氏の菩提寺である龍淵寺に奉納されました。これが、成田氏の家系を知る上で基本史料とされてきた「成田系図」です。成田氏の歴史は、長親の子孫たちによって伝えられてきたのです。

(郷土博物館 鈴木紀三雄)



成田系図(龍淵寺所蔵)

緊急告知

野村萬斎さんと工藤市長の対談が実現

映画「のぼうの城」の主人公、「のぼう様」こと成田長親役を演じた野村萬斎さんと工藤市長のスペシャル対談が実現。印象に残っているシーンや映画の撮影秘話、成田長親というリーダー像について、さらには石田三成が水攻めを行ってから、400年が経過した行田の印象などについて大いに語り合いました。

また、映画のエンドロール(終幕)では、私たちが住んでいる行田の風景が流れますので、最後まで目が離せません。

市民の皆さん、ぜひ、映画「のぼうの城」をご覧いただき、「行田は全国に誇れるまち」であることを実感してください。

対談の詳しい内容については、「市報ぎょうだ」平成25年1月号に掲載する予定ですので、乞うご期待。

※今月の「こぜにちゃんが行く! with フラベス」のコーナーはお休みさせていただきます。



野村萬斎さん(左)と工藤市長

今月の表紙

10月10日、総合公園自由広場で第58回行田市小学校連合運動会が開催されました。さわやかな秋空のもと、児童は1,000メートル走や走り高跳び、ボール投げ、100メートル走など8種目に分かれ、競い合いました。それぞれの種目に出場した選手たちは、これまでの練習の成果を発揮し、笑顔で大会を終えました。

- 市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)まで。
- 市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
- 市報をカセットテープに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)までご連絡ください。



市報ぎょうだは再生紙を使用しています